

# イタリア人の訪問者・熟知者と日本

## 鹿兒島調査旅行覚書より

### 根 占 献 一

#### I.

##### (一) 種子島

鹿兒島空港で、羽田より乗った大型飛行機を日本エアコミューター(JAC)の小型機に乗り換え、種子島に向かったのは昨年(二〇〇三年)九月二六日午後の事であった。天気は、これ以上は望むべくもないくらいの快晴であった。桜島の脇を通過し、大隅半島を左側眼下に見下ろしながら南下して行く。雄川が蛇行する根占町がよく見える。機影が海上を小さく移動する。三五分ほどの旅路であった。時刻は午後三時を廻り、日差しは一段と強かった。タクシーで島北部に位置する西之表市に向かい、海上に馬毛島を見た。今は無人島という。飛行時間より、この乗車時間のほうが長かった。

投宿してすぐに、明日はフェリーで鹿兒島市に戻る予定であったので便を予約しようとしたら、種子島・鹿兒島間の直行便は取れず、止むを得ず屋久島経由にした。この後直ちにホテルを出、見学できる場所はしておこうと考えた。少し歩いただけで鍛冶技術を活かした鋏や包丁の店がある。宿から

は急な坂を登った先に、今回の最重要な目標地があった。あるいは南蛮船を模した鉄砲館(種子島開発総合センター)では、戦国時代の一戦「禰寝戦争」が取り上げられていることを確認し、あるいはその激戦地となる道を挟んで真向かいの丘に位置する、榕城小学校のある赤尾木城跡を踏みしめた。同名の中学校も傍にある。ここで種子島家歴代の墓地に十六世紀の島主の名を探し、また永俊尼(洗礼名カタリナ)の墓石を認めた。近年制作された十四代時堯公の銅像のある場所より、ジェットフォイルの出る西之表港から広がる東シナ海を遠望した。ポルトガル人複数名の乗船が廻航して入港した赤尾木の津は、現在は通常西之表港と呼ばれる<sup>①</sup>。

鉄砲伝来に関わるこの有名な出来事は、禰寝戦争と前後して一五四三年に起きたとされる。同戦争は禰寝氏の名高い文書には現われない。この時の状況とポルトガル人の名や人数に関し、『種子島家譜』、『鉄砲記』とメンデス・ピントの『東洋遍歴記』(Peregrinação)(一三三—一三五章)では相違がある。ピントによれば、通訳を務めたのは琉球の女性であ

った。一説では名を玉城たまぎという。『種子島家譜』、『鉄炮記』では織部丞が沙上で筆談した。また、モルツカ諸島テルナテ総督アントニオ・ガルバンの『新旧諸発見記』(Tratados descubrimientos antiguos e modernos)などに基づいて、彼らの来島を一五四二年と見る説も有力である。また、ガルバンも同国人の航海者名と人数を挙げているが、先の文献とは違いが見られる。

高台を下り、フェリーの出る港へ向かった。途中で「ザビエル街道」の案内板が眼に入り、港の帰り、慈遠寺跡の八坂神社を訪ねた。やや疲れてきたためか、この地はかなり遠く感じられた。辺りはすっかり暗くなりかけていた。先のポルトガル人たちが滞在した宿坊はこの慈遠寺に属し、また、一五五一年離日するフランシスコ・ザビエルが厄介になったお寺とも伝えられる。島内最古の寺院として、その頃は威容を誇っていたであろう。鹿児島県では至る所で廃仏毀釈の過去の現場に立ち会う。かつての由緒ある寺院は姿を消し、社名に変わっている。時には学校の運動場などになって今日に至っている。明治期は神道と仏道の対立であったが、十五世紀後半の島内では、後述する鑑真が伝えた律宗と、法華宗(日蓮宗)の仏教内の宗論が激しく展開され、法華宗側が勝利を収めた。律宗寺院として出発した慈遠寺もここに法華寺となったのである。第十一代種子島時氏の頃である。

翌日早朝七時前から、見学できなかった種子島氏の菩提寺本源寺やお坊墓地などへ出かけ、懐旧の情に浸った。厳肅な佇まいを示すお寺には、誰一人居なかった。別の方角にある墓地には家々が近在した。さらに、投宿先の方向に引き返しながら、鉄砲鍛冶八板金兵衛の女子若狭の墓を目指して歩いたところ、彼の家跡を見出した。その後、つつがなくフェリーに乗船した。

時間の限られていた身としては、屋久島経由で鹿児島港に戻るのには直行便より優に一時間以上かかるために、かなりの無駄に思えてならなかった。船の空席も目立っていた。だが、種子島と屋久島の形勢の相違がよく分かり、とても勉強になった。両者は日本ではそれぞれ七番目と六番目の大きさの島であり、細長く平らかな感じの前者に対し、後者は地図の上では丸みを帯びているものの、険しい山々が海岸線まで迫っていた。この印象は実に鮮やかで、雪を被る高山があっても確かに不思議ではなくなった。

乗降客が入れ替わる間、私はしきりに二様の事柄を考えていた。ひとつは、この島が禰寝戦争の結果、一時期種子島氏の領有から離れ、口永良部島とともに禰寝氏の支配に帰したことである。両氏の対立には島津貴久が介入し、島津氏庶家いしづか新納伊勢守康久を坊津より派遣したことが知られる。『島津貴久記』によれば、出港は天文十一年閏三月六日であり、そ

の夜硫黄島に着き、つぎの日屋久島に着岸した<sup>(3)</sup>。もうひとつは、シチリアはパレルモ出身のジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ (Giovanni Battista Sidotti) の来島のことである。一七〇八年秋、彼は種子島に上陸したと航海誌に記しているが、島の記述内容から今日では屋久島のこととされている。捕囚の身となった彼は、こののち坊津から九州本土に連行されて長崎に行き、やがて江戸で新井白石から尋問を受けることになる<sup>(4)</sup>。この時、つぎの機会には坊津を訪ねることが固まった。

島からの、この初めての船旅は、飛行機のなかった時代、薩摩・大隅の両半島から形成される鹿児島が海上交通で結ばれていたことを実感させずには置かなかつた。硫黄島や開聞岳を左手に見ながら、錦江湾に入り、正午過ぎに上陸した。そして調査のため県立鹿児島図書館や黎明館に立ち寄った。図書館ではまず、川崎大十『さつま』の姓氏<sup>(5)</sup> (高城書房、二〇〇〇年)の一部をコピーした。私がかつて書いた論文<sup>(6)</sup>に基づき、家門系図が出ていることを偶然知ったからである。また黎明館では、以前観ることができなかった『禰寝重長公肖像』をしかと眺めることができた。重長<sup>しげたけ</sup> (一五八〇年没)は根占・小松宗家第十六代目に当たる領主で戦国時代の武将である。先の戦争の、一方の当事者とされるが、私見では年代を考慮すれば、実は彼の父清年こそがそうであろう<sup>(7)</sup>。

## (二) 坊津

つぎに、今年 (二〇〇四年) は坊津への旅が実現された。夏は猛暑となり、台風は例年になく多く、週を空けずに日本列島は暴風雨に見舞われていた。出発時の重陽の節句は、東京は晴れとなったものの、鹿児島島の週末の天候は降雨と出ている。鹿児島空港バスの夜の車窓には雨粒が付いていた。隣席の人から坊津へはバスで行くほうが便利と教えられた。調べた限りでは、列車か車が迷っていたのである。翌朝九時の鹿児島交通バスで山形屋バスセンターより枕崎に向かった。晴れている。十一時過ぎに到着予定である。以前、遠くの吉利 (日吉) や、また別の折、近くの知覧に旅した時の山道が思い起こされた。

鹿児島を始め、九州を旅する際に決まって携える『九州史跡見学』には、「筑前博多の那津、伊勢の安濃津とともに日本三津と言われた坊津は、枕崎からバスですぐです」<sup>(8)</sup>とあるものの、不安があつた。予想した通りにバスの本数は限られていて、タクシー利用の道しかなかった。前年の運転手——鹿児島や宮崎に多い「日高」姓だった——と違い、名を確認できなかった。また、こちらの訛りが乏しかった。行き先を告げたら、坊津はほとんど行ったことがなく、詳しくはないというから、出身を訊ねると、川辺とのこと。これには不思議な感じがした。川辺は今降りたばかりのバスが枕崎に

入る前に通った町である。どうも険しい山並みが隣村を隔てているらしい。言葉も違うという。二時半過ぎに枕崎駅まで戻るまで、三時間ほど乗車した。その間、昼食を取ることもなく、可能な限り移動した。

坊津はかねがね気に懸かる地であった。それはこの津から遣唐使船が発したり、琉球への旅路が始まったりするだけの地に留まらず、古来、重要人物がここから上陸したり、あるいはこの地に流されたりしてきた歴史的な町であったからである。日羅、鑑真らは仏教徒としてこの地に辿りついた。日羅は六世紀の人であり、今は見る影もない、大伽藍の一乗院の始まりはこの僧にあるとされる。坊津の坊はこの寺院に由来すると文献にある。一説によれば、日羅は肥後葦北の国造を父とするが、日本で出生したかどうかは不明らしい。坊津歴史資料センター輝津館のパンフレットでは百済僧とある。日系の高僧なのであるか。暗殺された年が五八三年であるから、日本に仏教が伝来してまだ半世紀も経過していない。この新しさはのちのキリスト教伝播と比較すると示唆深い。ともにそれぞれの時代のなかで、日本の国家建設に向かう途次での世界宗教との出会いであった。

鑑真は、日羅が没してから、およそ百年後に生を享けた高僧で、改めて説明する必要もなからう。ただ上陸した地点が秋目浦とされていて、坊浦でないことを知った。坊津には優

れた入り江、浦が幾つもあり、特に坊浦には一乗院を始め、近衛屋敷跡など旧跡が多い。輝津館も亦、そうである。秋目浦は町の最も北方であり、坊浦からは遠く、笠沙町や加世田市がかえって近い。したがってこちらの地区の住民は枕崎市とでなく、加世田との市町村合併を望んでいると、運転手はいう。国策により、町村合併が強力に全国津々浦々で推進されている。根占町の広報誌『ねじめ』によると禰寝氏に関わる四町は分裂気味であり、肝付氏に関わる町村のまとまりとは相違が見受けられる。

閑話休題。たったひとりの鑑真記念館員にある意味で意地悪な質問をした。それは、こちらに来るまで、坊津にこれほど数多い、良好な湾があるとは知らなかったので、鑑真が上陸した地点が確定できないのでは、と疑問をぶつけてみた。彼女の説明では、乗った船は琉球、屋久島と立ち寄りつつ、目標に開聞岳と野間岳を左右前方に見ながら秋目浦を目指したとのこと。文献史料（淡海三船『鑑真過海大師東征伝』）では「薩摩国阿多郡秋妻屋浦」と出て来るらしい。したがって間違いないところであろう。

最初に訪れた坊浦の話に戻ると、近衛信輔公の屋敷跡は小さ過ぎて四阿風であり、上ったところにある龍巖寺こそ彼の逗留先ではなかったかと思われた。一五九六年に京に戻るまで二年間のこの地滞在であった。もともと彼はシドッテ

イのように東シナ海側から上陸したのではなく、根占（禰寝）から船で山川に渡り、顛娃、枕崎和田浜（立神）を経て坊津へやって来た。キリスト教司祭が上陸したのは、天神の絵を描くのを好んだ公より百数十年後の当地である。『入唐道』（坊津町教育委員会。平成二〇〇一年改定<sup>マ</sup>）に、「宝永五年（二七〇八）八月二八日屋久島で捕まったローマ人宣教師シドッチを一時幽閉した所」（十五頁）という記事が見られる。松田毅一によれば、彼がマニラを出帆したのは、同年八月二二日であり、薩南諸島の一つを望見したのは、十月九日火曜日の八時頃と細かい<sup>10</sup>。四年間のマニラ滞在であった。ここで日本語を勉強することができた。輝津館の係りの女性も記念館の女性とともに、シドッチの話は知らなかった。先の記事を見ると、「十一月九日長崎に送り正徳四年（一七二四）十月江戸（東京）小石川のキリシタン牢で没す」とある。在牢は五年に及んだことになる。

枕崎駅前に戻る途中、開聞岳が麗姿を見せていた。お昼近くには見えなかったのが、今は眺望できる。あの時、運転手は残念がっていた。それは客に済まないという風であった。好感の彼は私と同年輩であった。私はこれで、大隅半島から何度か遠望しているので、両半島および空からも海上からも眺めたことになる。帰りのバス運転手の名は今給黎とあり、いかにも鹿児島に居ると感じ入った。また乗ってすぐに、鹿

籠（鹿籠）というバス停があった。この地名は中世史料に頻出する。枕崎などは出てこないが、旧い時代にはこの辺りの代表的な地名だったのではなからうか。バスは順調に進んだ。向かう時のように、乗降客もないのに時間調整と称して各駅停車をしなかったから、早く鹿児島市内に戻ったように思われた。西鹿児島駅は九州新幹線の始発・終点地となって駅名を鹿児島中央駅と変え、駅前広場は大きく変貌していることを知った。大モニュメント《若き薩摩の群像》の位置がこの廻りを受けて、一方に片寄り過ぎた嫌いが出て来ていないだろうか。今回の主目的はこうして終わった。

### （三）鹿児島人昨今

翌日は例によって図書館で調査する前に、市立美術館に入ることにした。それは今回の旅に出る前に初めて、この美術館に室町後期の等坡作《釈迦三尊像》（紙本墨画淡彩・三幅対）があることを知ったからである。インターネットの力である。残念ながらこの絵は見られず、往々著名な日本画展示に見られるように、期間限定でしか公開されないことが分かった。雪舟等楊の弟子、秋月等観に列なる画家だが、作品が少なく、『所蔵作品抄』の作家略歴・掲載目録によれば、本館蔵のその作品は現在彼の自作として確認されている唯一のものとなる。木村探元の口述筆記『三晝庵主談話』を引いて、

「等坡和尚ハ小根占園林寺住持ニテ秋月ノ弟子トナリ畫ヲカ、レ候」とあり、県下最古の曹洞宗寺院園林寺の住僧録には等坡はなく、『古画備考』には彼が日向出身の可能性があると続けている<sup>(1)</sup>。

日向と大隅の地の縁は非常に深いので、却って彼と根占(旧小根占)の關係は信憑性を帯びる。飢肥の連歌師隈江真存と禰寝氏第十三代尊重(一五四七年没)の親交はよく知られている<sup>(2)</sup>。拙著で、根占の山本八幡に等坡の作と覚しき麒麟の像があることを記したことがあったので、あとで同館に電子メールで質問した所、この絵のことは未確認と返信があった<sup>(3)</sup>。先述の《禰寝重長公肖像》の作者は不明であるものの、間違いなく禰寝氏の支配地には優れた画僧が存在したのであり、等楊、等観の流れを汲んでいる等坡が活動していた。雪舟はボッティチェッリと同時代人であり、秋月は一五二〇年に没している。この没年はラッファエッロと同年代である。等観の子に等観、等坡の門人に等薩がいて書画の人として名を残している。

不図、考え込んでしまったことがある。重長と伝えられる肖像画が尊重である可能性はないのだろうか。重長の曾祖父は拙著で詳述したように傑出した文化人でもあり、雪舟や秋月と同時代の武将であったからである。重長の同時代人である武田信玄のより周知の肖像画も、近年の研究では彼ではな

いらしい。十六世紀南大隅の文化状況解明のためには、等坡や等薩の生がより具体性を帯びねばならないだろう。それに種子島には同時期、堺の画工珠幸がいたことも付け加えておこう。

《釈迦三尊像》の代わりと言ってはなんだが、《天保年間鹿兒島城下絵図》の大作が広げられていた。これをここで見ることができるとは予想だにしていなかった。お陰で、ガラス越しに小松家の屋形を確認できた。後で分かったことだが、てっきり所蔵されていると信じていた、県立図書館のほうは写しということであった<sup>(4)</sup>。今日、屋敷跡に近いところに小松帯刀清廉の銅像が立ち、昔を偲ぶよすがとなっている。だいぶん前に訪れたことがある、彼の別邸があった原良の地も地図上に確認できた。若き薩摩藩家老として辣腕を揮った小松は、外国の知識を貪欲に吸収しようとした日記手帳を遺し、また留学生派遣に理解を示した、開明的な人物として知られる。今回、その写しを見ることができた。明治早々に亡くなるが、当時重責を担っていた彼は「浦上キリシタン処分問題」の解決などに尽力している<sup>(5)</sup>。先の『九州史跡見学』にはつぎのようにある。「小松帯刀は大久保利通や西郷隆盛などともに幕末薩摩藩の軍事・政治を担い、長州・土佐と盟約を結び、徳川慶喜に大政奉還を進言してその実現をみます。三十六歳の若さで病死します。その事績は大久保や西

郷の陰に隠されていてよいものではありません」<sup>16</sup>。

今回の調査旅行から得たもの、考えたことは何であろうか。研究対象がイタリアとルネサンスである以上、何かにつけて、この地、この時代に惹き付けて考究するのは、習い、性となっている。幸いに見ることができた《上野東照宮図》の画家曾山幸彦の師が、アキッレ・サン＝ジョヴァンニ (Achille San Giovanni) ——工部美術学校の画学教師として、後進の育成に尽力 (明治十三年—十六年「一八八〇—一八八三」——) だったことは今回の旅で再確認できた。《若き薩摩の群像》の留学生たちは英国滞在中に、イタリア系の高名な画家・詩人口セツティとその兄弟を中心とする、所謂口セツティ＝サークルと因縁浅からぬ関係があった<sup>17</sup>。こちらを知ったのは調査に出る直前であった。

その薩摩藩留学生でイタリアと関係が深かった人物は、根占出身の中村博愛であろう。調査する余裕が見出せず、二次文献を紐解くくらいが関の山である。彼に関する纏まった専門論文はないようだ。『幕末・明治期における日伊交流』資料編の索引では、「中村書記官、中村代理大使、中村博愛」と別項目立てとなっている。これでは別人のような印象を与えまいか。彼の上司と同じ薩摩藩出身の西郷従道がいた。同資料編駐イタリア特命全権公使・大使には、明治十一年四月十八日の項に「特命全権公使ヲ以テ駐劄未赴任、十一年五月

二四日罷、参議文部卿二任」とある。そしてすぐつぎの六月十日の項に「外務二等書記官、臨時代理大使」と中村博愛の記事がある<sup>18</sup>。

近年、維新後の西郷一家の写真を撮影したフェリーチェ・ベアト (Felice Beato) のことが新聞に出、話題となった。ヴェネツィア生まれのベアトの歴史的写真は、近年とみに注目されつつある。職業写真家ベアトの活動から、小松らの薩英戦争、長州藩の下関戦争等がクリミア戦争と同時代的出来事であることを再認する。中村と曾山、また中村と小松の接点は興味惹かれるところだが、曾山も小松も早世しているの、深いつながりは家老帯刀と家臣従道のようには見出せないのかもしれない。小松家にはのちに西郷従道の子孫が養子に入った。

## II.

### (四) ジョヴァンニ・ニコラオ・ダ・ノーラ

それらは十九世紀後半という、比較的近い時代に属している。研究対象とする時代、ルネサンスにも、また日本が所謂鎖国の状況にあった十七、八世紀にも興趣の尽きぬ東西の文化交流があった。等坡のような画家の活動は画業のありかたを、そして絵地図の迫力は新たにヨーロッパと日本の出会いに思いを馳せるに十分であった。絵と地図はともにきわめて

直接的、具体的であり、強力な磁場を生じさせ、これを見る者をそのなかに巻き込み、鮮烈な印象を刻み込む。シドッテイを取り調べた際に白石が参照した世界地図が想起されよう。そしてこの地図と、マチェラータ出身で明朝期に活躍したマッテオ・リッチの地図、《坤輿万国全図》との関係は如何。また、シドッテイがもたらした、同時代のイタリア人画家カルロ・ドルチ (Carlo Dolci) (工房) の油絵《聖母像 (親指の聖母)》(東京国立博物館蔵) は、ザビエルが持参した宗教画が島津貴久とその母の関心を惹いたように、最高の知識人のひとりだった、儒学者白石の心を捉えた。西洋画はそれほどまでに魅力的であった。況や信者においてをや、であろう<sup>19)</sup>。

キリシタン時代には、ジョヴァンニ・ニコラオ(ニッコロ、ニコーラ)・ダ(デイ)・ノーラ (Giovanni Niccolao [Niccolò, Nicolai] da[di] Nola) の活動が目される<sup>20)</sup>。ノーラはナポリ近郊の町であり、初代ローマ皇帝アウグストゥスが亡くなった地として知られる。パドヴァ大学生ポンポニオ・デ・アルジェリオ (Pomponio de Algerio, 一五三一一—一五五六) 、元ドメニコ会士ジョルターノ・ブルーノ (Giordano Bruno, 一五四八—一六〇〇) は同郷の先輩に当たるが、ニコラオの生き方は彼らと完全に違うことになる。なぜならひとりにはプロテスタントとして、もうひとりとは異端

者として、ローマのナヴォーナ広場とカンポ・デイ・フィオーリでそれぞれ生きながら処刑されるからである<sup>21)</sup>。カトリック教徒は、日本でそうであったように殉教者となることもに、別の型の殉教者を作ったのである。彼らに対し、同郷の後輩ニコーラ・マストリッリ (Nicola Mastriili, 一五七〇—一六五三) は、ペルーで活躍こそすれ、同じくイエズス会士となった。ノーラはいずれにせよ、小さな町ではない。ジエノヴァの名門家に一五六四年に生まれたカルロ・スピノラは一五八四年、この修練院 (noviziato) にいたことが知られている。日本で殉教するスピノラに関しては、後述するダニエッロ・バルトリ (Daniello Bartoli) の『イエズス会の歴史』(Storia della Compagnia di Gesù) に詳細な描写がある。ニコラオのように来日したイエズス会士に関する史料が乏しい場合、四冊の状況を考慮して置くことは肝要なことであろう。

そのニコラオは一五八二年、リッチとともにマカオに来了。翌年来日し、志岐(天草)、有馬、長崎で絵画と銅版画制作法を教えた。一六〇三年の長崎コレジヨのカタログによれば、四十三歳とある<sup>22)</sup>。画学舎の長として活躍し、一六二六年マカオで死去した。彼の弟子のなから、リッチのいた中国で活躍する者も現われる。日本生まれのジャコモ・ニーヴァ (Giacomo Niva, 倪一誠) は特に有名で、父は中国人、母は

日本人であった。またマヌエル・ペレイラ (Manuel Pereira, 游文輝) も忘れ難い。リッチの有名な肖像画は彼の手になる。それは、リッチ死去 (二六一〇年) 後四年目に、フランス人イエズス会士ニコラ・トリゴーによってローマにもたらされた<sup>(23)</sup>。ニコラオとリッチの関係は浅くはないが、絵画制作と地図製作は互いに無縁な技術ではなかったろう。《天保年間鹿児島城下絵図》はそのことを教えていよう。ニーヴァは絵画の面だけでなく、地図作成でも活躍していたことが分かっている<sup>(24)</sup>。

等坡たちと同様、ニコラオの絵とされているものを同定することは、諸般の事情により困難を伴う作業であろう。ただ私たちとしては、同時代のテイントレット (後述) 作品などのように、彼らの個人的な作を強く求める必要はないのではなからうか。流派、工房という言い方は彼らの身分にはむしろ似つかわしい。画僧にあつては、集団のなかで繰り返しされる主題にこそ価値があり、等坡流とかニコラオ風という言い回しを否定的に見るには当たらない。誰その影響を受けたと覚しき作品とか、誰それに影響を及ぼしたようであるとかいうような表現は彼らにあつては意義深いことであろう。研究者トゥッチが言うように、「ニコラオ派は日本で起こった発展のためだけでなく、中国で継続したその反響の故にも重要である」<sup>(25)</sup>。

また、ニコラオは教会行事に欠かせない、オルガンと楽器の製作にも従事したことが知られている<sup>(26)</sup>。これに関しては、私は個人的な研究者だったエドガー・ツィルゼル (Edgar Ziesel) の評言を用いて、彼のことを「高級職人」(superior artisan) と呼んだことがある。ニコラオにはたとえばレオナルド・ダ・ヴィンチと似通った面があつたであろう<sup>(27)</sup>。製作は同時にある程度の演奏可能——調音、調律は必須であろう——をも意味していたろう。明らかなのは、ニコラオの生地に近いナポリが伝統的にオルガン製作の盛んな地域であつたということである。ジュゼッペ・チェーチの研究は、具体的に技術者の名前と完成品が納められた聖堂の名を教えてくれる。それらの聖堂は南イタリアに広がっている。また有力貴族も依頼したことが分かる<sup>(28)</sup>。伝統的に家族・一族間で修得される技術であるとすれば、ニコラオの家も何か関わりがあつたのかもしれない。

モルマンノ (Mormanno) と呼ばれたジョヴァンニ・ドナディオ (Giovanni Donadio) は十五世紀の終わりから次世紀にかけて、高い名声を得た技術者であり、建築の分野でも活躍した。その弟子のなかにドメニコ会士トーマゾ・デ・アンジェロや、デ・ニコラ兄弟のジョヴァン・マッテアとジョヴァン・フランチェスコがいた。一五二六年ドナディオの娘と結婚した、ナポリ人ジョヴァン・フランチェスコ・デ

イ・パルマ (Palma) は建築家、オルガン製作者そして画家だった。彼も亦、モルマンノという愛称を持っていた<sup>28)</sup>。ナポリにおけるオルガン製作は主として一六世紀後半、デイ・パルマ一族による仕事であった<sup>29)</sup>。

目下のところ、ナポリ王国における、このような楽器製造の環境や同名人物(デ・)ニコラの存在と、私たちのニコラオとの関係は不明である。オルガンが据えられた地名にノラは出て来ない。旅行家に関する、アマート・デイ・サン＝フィリッポ (Amato di San Filippo) の古典的研究にはニコロ・ノラーノ (Nicolo Nolano)、ジョヴァン・フランチェスコ・ニコラ (Giovanni Francesco Nicola) の名を見出すが、別人である。前者は十四世紀に蒙古に派遣されたフランチェスコ会士であり、後者は典礼問題時の厳修会のフランチェスコ会士である<sup>30)</sup>。

##### (五) 大航海時代のイタリア人

これまで扱ってきたテーマは、東西交渉史とかキリシタン史とかに分類されるものであろう。特に後者のほうに属するのであろう。私には、キリシタン史の分野は他の外国史研究に比べて特段の研究成果を挙げているように思われる。フーベルト・チースリク師の厳しい批判が存在することは知っているが<sup>32)</sup>、所謂「キリシタンの世紀」、「キリスト教の時代」

は日本史の問題でもあり、一方的に他国にある史料とその史料を利用する外国研究者に結局は依存している場合とは明らかに違い、私たちの問題でもあるが故にその成果は獨創性に富んでいる。

ただし、この分野は主としてイベリア半島のポルトガルとスペインとのつながりで考察され、イタリアおよびイタリア人の存在が軽視されてはいないだろうか。往々にして「南蛮国」のなかにイタリアが欠けていることがあり、一驚する。幕末の『通航一覽』には同国が挙げられているのに、かつて幸田成友は度々、足利末期から徳川初期までの一世紀間に日本人が接した西欧人は、ポルトガル・スペイン・オランダ・英国の四カ国人とした<sup>33)</sup>。その後もイタリア半島やシチリア島出身者の帰属意識問題はあまり俎上に載せられていない。イタリアが統一国家でなく、むしろ一部はスペインの支配下にあったという事情もあるが、ポルトガルにはなんら占領されてはいなかった。イタリア意識 (Italianità) は存在していたし、その間のローマ教皇はすべてイタリア出身者であった<sup>34)</sup>。

東西往来の頻繁さ、人や物の移動の大規模さ故に所謂「地理上の発見」時代または大航海時代とも表されるこの時代に、イタリア半島出身者は大いに活躍した。ポルトガルではカ・ダ・モスト (カダモスト、カダ・モスト、Ca' da Mosto) 、

スペインではコロンボ (Colombo)、フランスではヴェラツザノ (Verrazano)、英国ではカボット (Caboto) 父子の名が直ちに浮かぶ。彼らに加えて、最初の世界周航を成し遂げたひとりで、その意義ある記録 (*Relazione del primo viaggio intorno al globo terraqueo, 1525*) を書いたアントニオ・ピガフェッタ (Antonio Pigafetta) もいる。そこでは「日本」(Cipangu) も言及されている。アメリゴ・ヴェスプッチ (Amerigo Vespucci) にはもはや贅言を要しないだろう。

他方、この時代はルネサンスと呼ばれる文化変動の、画期的な時代でもあり、イタリアの影響がヨーロッパ全土に及び、探検者と同様に活躍する同国人にも事欠かなかった。にも拘わらず、イベリア半島とイタリア文化との関係に注目する論者は多くない。船はリスボン港から出て日本に向かったにしても、彼らの精神的・思想的港湾はどうなのだろうか。イタリア系イエズス会宣教師の活動、教皇庁とイエズス会本部のあるローマの存在の大きさには、より真つ当で正当な歴史的評価が下されるべきであろう。アレッサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano) をはじめ、イタリアで教育を受けた人は少なくなく、ルネサンス・ヒューマニズムとの関連は当然視野のなかに入れなければならない<sup>(35)</sup>。しかも、このヒューマニズムは古典的教養を積むだけの教育ではな

く、社会的実践とも関わる、生きた教育の謂いである。

また修道会士はイタリア系でなくともよい。イタリア的環境が注視されるべきである。ザビエルはポローニャ大学で学んだ父と違い、長期間学んだ先はスコラ学の牙城パリ大学であったけれども、当時のパリとイタリア・ルネサンスの関連は緊密であった。それにロヨラ、ザビエルとその仲間がパリからヴェネツィア(一五三六―三八年)に移り、ここを拠点にイタリアで意義ある活動、説教や慈善の仕事を長く展開していたことも考慮に値しよう。イエズスのコンパニアの軍隊的規律だけが強調されるが、このような扶助会的側面——それはヴェネツィアを始め北イタリアでかなり練成された——は決して蔑ろにされてはならない。その点、チースリクはさすがにコンパニアのイタリア的起源から説き始め<sup>(36)</sup>、キリシタン時代の信徒たちの団体、「組」に言及することを怠らない。

しばらく同時代のヴェネツィア共和国に留まってみよう。プロテスタントの影響色濃い、ベネデット会士ベネデット・ダ・マントヴァ (Benedetto da Mantova, ベネデット・フォンタニーニ Fontanini) の『キリストの恩恵』(*Il beneficio di Cristo*) が一五四三年に、またルネサンスを代表するヒューマニスト、スペインはビベスの『貧窮者支援』(*De subventione pauperum*) と英国はモアの『ユートピア』のイ

タリア語翻訳がそれぞれ、四五年、四八年に出版され、或いは四七年にはコーランが訳された地として、近隣遠方を問わず人的・物的、双方の流動激しい、この都市の意義と役割を考えないわけに行かない。この町には、日本に最初に言及したヨーロッパ知識人のひとり、ギョーム・ポステルが魅惑され、また天正遣欧使節の肖像画を依頼された、生粋のヴェネツィア人画家ティントレット (Tintoretto) が彩管を揮い、教会芸術にも新局面が現われる。ここでは社会生活とヘルメス主義的・新プラトン主義的、理想主義的・福音主義的思想が限りなく交錯していた<sup>(37)</sup>。作家のアントン・フランチェスコ・ドーニ (Anton Francesco Doni)、科学者のフランチェスコ・ジョルジョ (Giorgio)、建築家のパツラーディオ (Palladio) からもこの列に加わる。ヴァリニャーノが学んだ大学はヴェネツィア共和国に属するパドヴァにおいてであった。

私たちはこの時代、大航海時代の英雄たちとともに旅をしたり、また記録を残したりした人が誰かに余り関心を示さない。その時代を切り開いた人としてエンリケ航海王子は名高いが、彼に仕え、記録 (*El libro de la prima navigazione per oceano alle terre de Nigri de la Bussa Etiopia*) を残したヴェネツィア出身のカ・ダ・モストは忘却されている。もしかしたら、ポルトガル人と思われるかもしれない。北伊アロー

ナ生まれでコロンボなどの航海の貴重な記録 (*De orbe novo decadis octo*) を認めた、スペイン宮廷の要人ピエトロ・マルティレー・ダンギエーラ (*Pietro Martire d'Anghiera*) の名も逸することはできないが、まったく異なった方面の別人ピエトロ・マルティレー・ヴェルミリ (*Verrigli*) の名と紛らわしい。彼らに較べれば、トレヴィーゾ生まれで、ヴェネツィア共和国で公職の身にあつたジョヴァンニ・バッティスタ・ラムージオ (*Giovanni Battista Ramusio*) は見当が付く人が大勢いるだろう。彼の『航海と旅路』 (*Delle navigationi et viaggi*) 全三巻 (一五五〇—五九) は、それまでに行なわれた旅と新たな時代の大航海を記録するもつとも重要な文献であり、日本のことも含まれる。うち二巻は地元の著名な出版業者トンマーズ・ジュンティ (*Tommaso Giunti*) により名を出さずに公刊され、残りの一巻——真ん中のアジアの巻だが——は著者の死後、名を冠して世に出た。その後多くの版が現われるが、近年でも全六巻で出版されている<sup>(38)</sup>。

#### (六) 訪日しなかった日本通のイエズス会士

似たことは、宗教の分野でも起きていないだろうか。日本は来たイエズス会士は割と知られ、分けてもザビエルの名は遍く浸透している。彼の困難に満ちた宣教活動は信徒、非信徒を越えて感動を与えるし、日本の印象を述べた言葉はいつ

までも記憶されて行くだろう。これに対し、来日しなかったものの、仲間の修道会士の報告——それは在欧のヴェネツィア大使の仕事を想起させる——などを元にアジアや日本での彼らの活動を記録し、格段の東方世界情報を西欧世界に広めた著作家たちは多く無名のままになっている。彼らも亦、実は近代における日本と世界の関係を考えるうえでとても重要なのである<sup>(39)</sup>。一五三三年ベルガモ生まれのジョヴァン・ピエトロ・マツフェイ (Giovann Pietro Maffei) は、そのなかで最右翼であろう。上述した大航海に関する記録や「再認されたインディア (インド等のアジア)」(India recognita) の情報に、マツフェイは心驚ろかせていたに違いない。彼は日本が発見された同時代を生き、ルイス・フロイス著『日本史』の完成に期待し、メンデス・ピントには面談したひとりとなつた<sup>(40)</sup>。

ピントとは、きわめて早い時期に、つまりザビエル以前に日本にやってきたポルトガル人のひとりであり、奇想天外な『東洋遍歴記』の作者(既出)のことである。種子島に漂着した船にいたひとりなのか、実際には何度日本に来たのか、その叙述から問題になる。またピントはザビエルと親しく、ヨーロッパ在住のイエズス会士が「東洋の使徒」を知る、もしくは調査するうえで重要な情報を握っていた男であつた。ただポステルと同じく一旦はイエズス会士となつたが、また

離れた、あるいは適切には会から追放された、問題ある人物でもあつた。一五五八年に母国に帰り、八三年に亡くなるが、死の前年、マツフェイからポルトガルでの聞き取り調査に応じている。イタリア人のほうは八四年にローマに戻り、一六〇三年にティヴォリで死去した。そのような事情もあり、ピントの言は信用されず、一五八八年に公刊された、マツフェイの傑作『インディア (アジア) 史全一六巻』(Historiarum Indicarum libri XVI) には反映されていない<sup>(41)</sup>。

『東洋遍歴記』の初版が出るのは一六一四年のことだが、マツフェイが会つた時にはその原稿は出来上がつていて、写本は出回つていたと目される。

シュールハンマーの考証によれば、同じイエズス会士オラツィオ・トルセツリーニ (Orazio Torsellini) の『フランシスコ・ザビエル伝』(De vita Francisci Xaverii) の第二版(一五九六年、ローマ。初版は一五九四年、同地)にはその確証があるという<sup>(42)</sup>。脱会者の、あるいはユダヤ系の会士の問題、ロヨラの方針とトレント公会議の影響問題など、歴史的に検討すべき諸点が多いが、ここでは立ち入らない。ローマ出身のトルセツリーニは二二年間ローマ学院 (Collegium romanum) で教鞭を取り、生地で亡くなつた(一五四四年—一五九九年)。そのラテン語による伝記の一般語訳に、フィレンツェ市民 (citadino)、ロドヴィーコ・セ

ルグリエルミ (Lodovico Serruglielmi) によるトスカーナ語訳がある。フェルディナンド・ゴンザーガあての、セルグリエルミの献辞の日付けは一六〇五年二月二三日である<sup>(43)</sup>。トルセツリーニの著書はラテン語・俗語を問わず、日本の図書館や関連施設には入庫しているようであり、私が初めてこの著作を見たのは南蛮文化館(大阪)においてであった。

他に、マッフエイに似た立場のイエズス会士に、一五三三(一五三二)年マントヴァ生まれのアントニオ・ポッセヴィーノ (Antonio Possevino)、そして時代は下るものの、一六〇八年フェツラーラ生まれのダニエツロ・バルトリなどが数えられよう。ポーランド、ロシアで活躍したポッセヴィーノは晩年をパドヴァで過ごしたが、その『蔵書精選』(Bibliotheca selecta) は初版が一五九三年、ローマで出た。初期の貴重な日本情報が含まれている本書は今日、稀覯本に属している。

これに対し、種々の版があるバルトリの『イエズス会の歴史』は、一七世紀の文学作品として著名である。全体では二七巻から構成され、日本だけに限れば、五巻からなり、一六六〇年に初版が出た。近年の縮刷版の裏表紙にはつぎのような宣伝文句が載っている。「マルコ・ポーロより三世紀後に、日本について書くのがダニエツロ・バルトリである。彼は決して日本を訪れず、仲間の宣教師の書簡や報告書を介して、

またメルカトルの地図——その上で彼らの旅路を追っている——から日本を知った」<sup>(44)</sup>とある。本文中に富士山の詳細な記述があり、目を引く<sup>(45)</sup>。邦語世界では、バルトリの名の広がりやチースリクに負っているのではなからうか。管見の限り、師は特にベトロ岐部カスイに言及する場合(『世界を歩いたキリシタン』(春秋社、一九七一年)、『キリシタン時代の邦人司祭』(キリシタン文化研究会、一九八一年)、『続 キリストの証し人』(聖母の騎士社、一九九七年)には、必ず『イエズス会の歴史』から引用している。

ところで、マッフエイ、ポッセヴィーノ、バルトリと違ってインドまでは来ていたものの、日出る国に來なかつた最重要人物にニコラオ・ランチロット (Nicolaio Lanciotti) がいる。ザビエルがインドを離れて訪日する前に、一五四八年、ランチロットはゴアで日本の情報を薩摩の弥次郎 (Yajiro, Angero) から集めることに成功した。そしてこの情報は直ちにヨーロッパまで伝わり(翌四九年)、大きな影響を及ぼすことになる。ポステルであれ、ラムジオであれ、あるいはマッフエイらであれ、それは彼らの日本に関する知識の根底を形成する。この国に向かうザビエルも頼りにした、生きた情報であつた<sup>(46)</sup>。

ランチロットは一五一五年と二〇年の間にウルビーノに生まれ、亡くなったのは、一五五八年四月七日、タイ

ロン (Quilon, Coulan) であった。この間、彼は創設期初期のイエズス会士のひとりとなり、一五四二年からはポルトガルのコインブラで学んで四四年には司祭となった。一五四五年三月二五日もしくは二九日にインドに向けて出港し、九月二日にはゴアに上陸する<sup>(47)</sup>。彼に関してはまだまだ不詳の点が多いが、マツフェイ同様に、ルネサンス・ヒューマニストのひとりとならなして構わないであろう<sup>(48)</sup>。

旧きインドで、ルネサンス文化の有力な町の出身者が南日本の人たちと出会い、多方面に互る知識を得ようとしている姿は、まさに大航海とイタリア・ルネサンスの新たな時代を象徴している。インドは日本・ヨーロッパ間の重要な経由地であり、この地に滞在した者、立ち寄った者に関しては洋の東西を問わず、各時代状況のなかで厳密な歴史的把握がなされなければならないだろう。ヨーロッパで学ぶ最初の留学生として、ザビエルに期待された鹿児島生まれの日本人ベルナルドは、この文脈のなかで真つ先に注目されよう。インドを経由した時、そこにはこのランチロットがいたのである<sup>(49)</sup>。

注  
1. Olof G. Lidin, *Tanagashima. The Arrival of Europe in Japan*, Nordic Institute of Asian Studies Monograph Series, No. 90, Copenhagen, 2002, 57(S)写真に二九代現宗主が時亮銅像とともに写っている。「禰寝戦争」に関しては、*Ibid.*, ch.3. 永俊を始め、鹿児島に関わるキリスト教関係者については、パチェコ・デイエゴ「鹿児島島のキリシタン」春苑堂書店、一九七五年。

2.

Lidin, *op.cit.*, 18-35. 根占献一「東西ルネサンスの邂逅——南蛮と禰寝氏の歴史の世界を求めて」東信堂、一九九八年、一〇二頁。所庄吉「鉄砲伝来をめぐって——その正しい理解のために」、『鉄砲伝来前後——種子島をめぐる技術と文化』、種子島開発総合センター編、有斐閣、一九八七年、四五—七三、特に六二—六三頁では、難船による来島を一五四二年、鉄砲伝来を一五四三年とし、『鉄砲記』には天文十二年、一五四三年に台風で漂着したとは書かれていないという。『鉄砲記』原文と読み下し文は、清水紘一「織豊政権とキリシタン——日欧交渉の起源と展開」岩田書院、二〇〇一年、八一—八八頁に収録されている。同書は、注目すべきことに第一部第一章で禰寝戦争との関連でこの問題を追究し、来島が四二、四三年であったが、最初の年にすでに鉄砲が伝わったと主張している。また禰寝氏庶流池端弥次郎重尚にも検討が加えられている(同書、五六—五八頁)が、弥次郎重尚を詳述した、つぎの研究書は挙がっていない。岸野久「ザビエルと日本」吉川弘文館、一九九八年、一三七—一五四頁。根占、前掲書、九三—九七頁参照。

3.

清水、前掲書、四四—四六頁。根占、前掲書、七〇頁。康久の身近な人たちのなかからキリシタンが出たことに関しては、同書、一〇一、一七七頁。

4.

カロリーナ・カバツ「宣教師シドットテイの研究」、『神戸女学院大学論集』、通巻第一四四号(二〇〇二年、一〇一—一四三頁。教えられることの多いこの論文をコピーし、送っていただいた高橋友子神戸女学院大学教授には心よりお礼を申し上げる。カバツ女史は説得力を以てシドットテイがイエズス会に属していないことを明らかにしている。日本ではしばしば私を含めて同会宣教師としてきた。根占、前掲書、二〇八頁。最近ではマテオ・リッチ「天主実義」柴田篤訳、東洋文庫、二〇〇四年、三三五頁の訳者解説。

5.

「根占権之丞清長のこと——衆中交替期の一人についての素描」、『鹿児島中世史研究会報』第四四号(一九八六年)、二〇—二六頁。

6.

根占「東西ルネサンスの邂逅」、六七—六八頁。清水、前掲書は、戦争時の禰寝側の領主重長が指揮を取るには幼すぎることを経験していない。なお、リディンがShigenagaと表記している——日本人の研究者も「しげなが」と読んでいる場合が少なくない——が、時には一次史料に「重武」と充てられているので、Shigenagaとすべきであろう。

7. 川添昭二『九州史跡見学』岩波ジュニア新書、一九八九年、一八三—一八四頁。優れた中世史家の手になるこの書は、単なるジュニア向け（「です、ます」調）ではない。
8. 坊津に関わる禅僧の道元や栄西、キリスト教宣教師のザビエルらについては、『鹿児島県姓氏家系大辞典』角川書店、一九九四年、一六二—一六三頁。ただし、根占、前掲書、八二、一七七頁と比較参照のこと。一六三〇年、ローマから帰国したベトロ岐部については、H・チースリック監修・五野井隆史著『ベトロ岐部カスイ』大分県教育委員会、一九九七年、二二七—二二九頁。小論の初めのほうで記した鉄砲との関係でいえば、明の鄭舜功『日本一鑑』には平戸、豊後（府内）、和泉（堺）とともに坊津が鉄砲製造地として出ている。
9. 根占、前掲書、一八九—一九一頁。信輔は彌重長弟の女子との間に一子を儲けた。私はここで『西藩野史』から引用したが、『薩藩旧記雑録』も挙げて置くべきだったろう。
10. 『南蛮巡礼』中央公論社、一九八一年、九四頁。
11. 『鹿児島市立美術館所蔵作品抄』（一九九五年）、一五一頁。
12. 根占、前掲書、五五—五八頁。
13. 同上、七四頁。鹿児島市立美術館学芸係奥美由貴様からの二〇〇四年九月十六日電子メール。
14. 同上。
15. H・チースリック監修・太田淑子編『日本史小百科キリシタン』東京堂出版、一九九九年、二九九頁。
16. 川添、前掲書、一七八—一七九頁。ここでは一部漢字表記を用いた。根占『小松帯刀とカヴール』一八六〇年代の日伊関係、『日伊文化研究』第二六号（一九八八年）、四三—五四頁。
17. 大塚孝明『近代西欧文明と鹿児島』英学移入から留学生派遣まで、「『薩摩と西欧文明』ザビエルそして洋学、留学生」ザビエル渡来四五〇周年記念シンポジウム委員会（鹿児島純心女子大学）編、南方新社、二〇〇〇年、四七—八一頁、特に七〇頁で、つぎの論文が指摘されている。谷田博幸「ロセッティと薩摩藩留学生と」W・M・ロセッティ宛のG・P・ボイス未刊書翰一通をめぐって、早稲田大学美術史学会『美術史研究』第二七冊（一九八九年）。
18. 根占『東西ルネサンスの邂逅』九七頁。『幕末・明治期における日伊交流』日伊協会編、日本放送協会、一九八四年、八三、一二五頁。石井元章『ヴェネツィアと日本』美術をめぐる交流』ブリュッケ、一九九九年、四八頁。また注三参照。
19. 『来日四五〇周年大ザビエル展 図録』（東武美術館・朝日新聞社）、一九九九年、図録番号一七三。根占、前掲書、一〇〇—一〇一頁。『長崎のコレジ』純心女子短期大学・長崎地方文化史研究所編、一九八五年、九一頁。
20. シュールハンマーは、ニコラオは一五六〇年ナポリ生まれと記している。G. Schurhammer, Die Jesuitenmissionare des 16. und 17. Jahrhunderts und ihr Einfluss auf die Japanische Malerei, in id., *Gesammelte Studien. II Orientalia*, Rom/Lisboa, 1963, 771. 彼の論文の初出は一九三三年。Fonti riciane, edite e commentate da Pasquale M.D'Elia, 1942, I, *Storia dell'introduzione del Cristianesimo in Cina*, 231 n.3ではテリリアはサレルノ近郊ノラ生まれとして、典拠を挙げている。また大冊'D'Elia, *Il mappa mondo cinese del P. Matteo Ricci S.J.*, commentato, tradotto e annotato, Vaticano, 1938, 223-224, n. 358ではナポリ近郊ノラとしている。
21. E. Rodocanachi, *La Riforma in Italia*, Paris, 1921, II, 111-112, 五四九。ブルーノ *Ibid.*, 四三四—四三七。F.C. Church, *The Italian Reformers 1534-1564*, New York, 1932, 221-222. 近年の研究ではS. Caponetto, *La riforma protestante nell'Italia del Cinquecento*, Torino, 1992.
22. 片岡千鶴子『八良尾のセリナリヨ』キリシタン文化研究会（上智大学）、一九七〇年再版、六一—六六頁。『長崎のコレジ』一三頁。
23. G. Tucci, *Italia Orientale*, Milano, 1949, 151-155. イエズス会宣教師のみたらした宗教画の影響や彼らの美術活動を扱う、最も基本的な論文は Schurhammer, *op.cit.*, 769-779.
24. D'Elia, *Il mapamondo cinese*, 224.
25. Tucci, *op.cit.*, 155.
26. Schurhammer, *op.cit.*, 772.
27. 根占、前掲書、一〇二頁。ツィルセルの名は出してはいないけれども。岡本良知「初期洋画の育成—耶蘇会の画学舎」、同『キリシタンの時代—その文化と貿易』高瀬弘一郎編、八木書店、一九八八年、五六—七三頁所

収、特に七〇頁に「ジョワンニ・ニコロは、ルネッサンスのイタリア芸術家の多芸多能な特徴を具へたる」云々。論文初出は一九五二年。

28 G. Caci, *Maestri organari a Napoli dal XV al XVIII secolo*, in *Scritti storici, Nozze Cortese/De Cicco*, Napoli, 1931, 1-10.

29 *Ibid.*, 4, 6.

30 *Ibid.*, 7, 8.

31 Amato di San Filippo, *Studi biografici e bibliografici sulla storia della geografia in Italia. I Biografi italiani colla bibliografia delle loro opere*, Roma, 1882, 104, 458. 私の引用は復刻版からであるが、書物の成立には第三回までの「万国地理会議」が貢献している。ヴェネツィアで開かれたこの会議に関しては、石井、前掲書、四七―四八頁参照。ローマ駐在の臨時代理公使、中村博愛はこの会議に関わる。

32 チースリク『キリシタン史考』聖母の騎士社、二〇〇二年、第四刷、一一七、二〇二―二〇五頁。つぎの文と比較参照のこと。高瀬弘一郎『キリシタンと統一権力』同『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店、二〇〇一年、三―三六頁所収、特に三〇頁に「表向きは顔だけを見てキリシタンを語ることは出来ない。イペリア両国の国家事業の一翼を担う形で布教が行なわれた教会活動の現実、それにイエズス会特有の体質も加わって政治や貿易に余りにも深入りすぎたこと、さらには日本布教方針の面での破綻と挫折等を考えれば、キリシタン教会がわが国で排斥されたのは当然の成行きと言えないであろうか」と。論文初出は一九七五年。高瀬の批判的眼差しはつぎの書でも顕著である。同『キリシタンの世紀』ザビエル渡日から「鎮国」まで』岩波書店、一九九三年。著者の史観については、清水、前掲書、序章、特に九―一四頁参照。

33 根占、前掲書、一三頁。

34 高瀬「大航海時代とキリシタン——宣教師の祖国意識を中心に」同『キリシタン時代の研究』岩波書店、一九七七年、三九―七四頁所収、特に四一頁では、日本イエズス会のパードレたちはポルトガル、スペインとならんでイタリア出身者がその大部分を占め、しかも幹部パードレでは西伊が優位に立つとある。同『キリシタン宣教師の軍事計画』七五―一七一頁では、布教保護権 (*padroado*) と武力征服事業が関連していたとの観点——筆者の持論である——から、葡西の日本占領あるいはシナ征服への関心が繰述されているもの、これらの長大な論文を以ってしても、祖国は葡西

ではありえなかつたイタリア系宣教師の「祖国意識」や「版図拡大理由」は殆ど不明である。同、前掲論文「大航海時代とキリシタン」、六九―七〇頁では、布教保護権の見直しと布教聖省 (*Sacra congregatio de propaganda fide*) の有力人物が指摘されていて興味深い。「十七世紀に入ると、従来海外布教を布教保護権の制度によってイペリア両国に委ねてきたことに対する反省から、教皇庁自身が布教活動の主導権を握らうという傾向が強まり、そのために一六二二年海外布教を管轄する布教聖省が設置される。この布教聖省の初代書記官となり、二十七年間その地位にあったイタリア人の(フランチェスコ・)インゴリは、布教保護権による教会活動の欠陥として、アジア原住民の司祭叙品が疎かにされてきたこと等を指摘している」と。

35 尾原悟「日本で活躍したイタリア人——ヴァリニャーノの教育・出版活動を中心に」、『国際シンポジウム 日伊文化交流の五〇〇年 報告書』ピエロ・コッラデーニ編、二〇〇三年、ローマ、二二五―二四〇頁所収、特に二二二―二三三頁。報告書には邦文とともに伊文(当該論文なら四七―六四、五四―五六)も含まれている。当報告書の教示のみならず、恵投に与った田中英道東北大学教授には心よりお礼を申し上げる。

36 チースリク『キリシタンの心』聖母の騎士社、一九九九年、第二刷、一五九、二三八頁。特にフィレンツェの始まりが指摘されている。ただ人名に誤植が見られる。最近の成果として、川村信三『キリシタン信徒組織の誕生と変容』教文館、二〇〇三年。

37 根占「ルネッサンス史の中の日本——近代初期の西欧とアジアの交流」、『藝林』第五二巻第一号(二〇〇三年)、七一―九八、特に七七―八〇頁。Kenichi Nejime, *Gli scambi culturali fra il Rinascimento italiano e[da] il Giappone*, in *Gakushuinshūhōdaigaku-kyō*, 6 (2004), 17-23. F. Gandolfo, *Il dolce tempo. Mistica, ermetismo, e sogno nel Cinquecento*, Roma, 1978.

38 Ranniso, *Navigazioni et viaggi*, 6 voll., a cura di M. Milanese, Torino, 1978-1983.

39 つぎの論文には重要な指摘がある。高祖敏明「江戸時代の日本に与えたイタリア人宣教師の影響——イエズス会士ジュリオ・アレニの場合」、『日伊文化交流の五〇〇年』二四―二五四頁(伊文六五―八一)所収、特に二五四頁(伊文八一)の結び。

40 G. Le Gentil, *Fernã Mendes Pinto. Un précurseur de l'exotisme au XVIe siècle*,

41. Paris, 1947, 28.  
 【インディア(アジア)史】の初版は本文で述べられている通りだが、(1)のほかに書に添った。Maffei: *Opera omnia latine scripta nunc primum in unum corpus collecta. Accedit Maffei, vita Petro Antonio Serassio auctore*, Bergamo, Petrus Lancellottus, 1747, 2 voll. (1)の第一巻に「インディア(アジア)史」が含まれる。
42. Schurhammer, Ferrão Mendes Pinto und seine *Peregrination*, in *Id., Gesamelte Studien II Orientalia*, 23-103, 特754-56. (1)の論文の初出は一九二六年。「東洋通歴史」三(東洋文庫、一九八七年初版第二刷)の訳者岡村多希子は解説で、「ザビエル伝」初版刊行年の一九九四年を挙げている。同上、三〇一頁。そして注一八(三三三頁)で、「ロドリゲス『日本教会史』(岩波書店、一九七〇年)の該当頁を参照とある。該当箇所を見ると、こちらの訳者たちは一九九六年を挙げていることが分かる。
43. *I Giuristi tipografi editori di Firenze 1571-1625. Annali inediti con un'appendice sui bibliografi dei Giuristi*, a cura di L. Silvestro Camerini, Firenze, 1979, 141, 203.
44. D. Bartoli, *Giappone. Storia della Compagnia di Gesù*, a cura di N. Majellaro, Milano, 1958の裏表紙。Ibid., 23-40 (introduzione), 特127は関連箇所。学習院女子大学図書館には、Ibid., *Della storia della Compagnia di Gesù, L'Asia*, Brescia, 1830, 14 voll が収蔵されている。
45. Bartoli, *Giappone*, 169-170.  
 根占「前掲書」八〇頁。A. Aurati, *Niccolò Lanicotto. Un gesuita urbinato del secolo XVI in India benemerito della cultura*, Urbino, 1974, 33-34. 岸野久「西欧人の日本発見——ザビエル来日前日本情報の研究」吉川弘文館、一九九五年第二刷には、ランチロット関係の緻密な論文が多く収録されている。のみならず大部な複写資料(写真)が添えられていて貴重である。ただ、残念ながら一点として翻刻されていない。また、第一日本情報第二稿(本文イタリア語)には複写資料がなく、第一日本情報第三稿(本文イタリア語)には複写資料があるものの、すでにアウラティには手稿本が転写、翻刻されている。岸野、同上、二二六頁、一四二頁。Aurati, *op.cit.*, 51-64. 根占「ルネサンス史の中の日本」九二—九四頁注(九)参照。
47. Aurati, *op.cit.*, 19-21, 28.

48. Ibid., 17 n.5. (1)の注でアウラティは、(1)の名著を挙げている。Tecchi Venturi, *Storia della Compagnia di Gesù*, vol. II, parte II, pag. 328.  
 ヴェネレート「関」123 Maffei, *op.cit.*, I, 405. 古典的論文は D'Elia, Bernardo, *Il primo giapponese venuto a Roma* (1955), in *La Civiltà cattolica*, vol. CII (1951), part III, 277—87, 527—35. 根占「東西ルネサンスの邂逅」九七一—一〇〇頁。なお、(1)の論文はインドに関し、いくらか役立とう。小論「ニコロ・デ・コンティの旅とトスカネッリの地図およびポッジョの「再認められたインディア」」(地中海研究所紀要)早稲田大学、第三号、近刊。
49. 付記。本調査等は学習院女子大学特別研究費(平成一六年度共同研究)に負う。

(本学教授)